

特集 1 / 『公共研究』 第 20 巻刊行記念

巻頭言 『公共研究』 20 巻刊行に寄せて

京都大学人と社会の未来研究院教授
広井 良典

このたび『公共研究』の刊行が第 20 巻を迎えたことを機に、一言メッセージを記させていただきたい。

『公共研究』が創刊されたのは、千葉大学において採択された 21 世紀 COE プログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」（2004－2008 年度の 5 年プロジェクト）における活動の一環としてだった。

同プロジェクトは、①福祉と環境の統合を通じた「持続可能な福祉社会」という社会モデルの構想、②「公共研究」という革新的学術分野の確立、③市民社会との直接的な対話・交流を通じた新しい大学そして学問のあり方の創造、という 3 つの柱を掲げたプロジェクトで、機関誌『公共研究』の刊行や対話研究会、国際シンポジウムを含む多くのシンポジウムやセミナー等を重ね、また和文・英文等を含む著書、学術論文等の成果を公にした。そして COE プログラムの終了後も『公共研究』の刊行は継続して行われ、今日に至ったのである。

巻の号数が示すとおり、この間に 20 年という長い歳月が流れたことになり、個人的な思いを記すことをお許しいただけるならば、様々な感慨を禁じ得ない。また、21 世紀 COE は日本で初めての拠点型研究プログラムだったが、その終了後も機関誌が長期間継続して刊行され現在にまで至っているのは、寡聞にして本『公共研究』が唯一のケースではないだろうか。関係者の方々の御尽力に深く敬意を表する次第である。

さて上記 COE の内容について補足する意味で、COE の成果物として刊行された 4 巻の書籍シリーズ『持続可能な福祉社会へ——公共性の視座から』（勁

草書房刊。各巻の編者は広井のほか小林正弥・倉阪秀史・安孫子誠男・水島治郎・柳澤悠・栗田禎子の先生方)の出版準備の段階で、その企画趣旨として記した以下のような文章が私の手元に残っていたので、その一部を御紹介させていただきます(強調は原文)。

* * *

現在の日本社会ほど「公共性」というテーマが具体的な形で問われている時代はないといってよい。たとえば、日本社会がこれまで経験することのなかった形で進行する様々な格差や排除、コミュニティの崩壊といった状況に対応し、あるべき政策を展開していくにあたり、まず問われるのは公共性ということの根底的な意味の問いなおしである。同様に、現在喫緊の課題となっている環境をめぐる諸問題に対応していくにあたって、世代間の公平性や継承性、人間と自然の関わり、地球レベルでの対応を律する基本原理のあり方など、そこで鋭く問われているのは公共性の現代的な意味に他ならない。そして私たちがここで新たに提示したいのは、①公共性についての哲学的・原理的な探求(=公共哲学)、②公共性をめぐる国際比較や歴史的吟味(=国際公共比較)、③現実に生起している問題群を解決していくための政策的・実践的研究(=公共政策)の三者を統合した、「公共研究」という新たな学問のパラダイムである。

他方、私たちは公共性をめぐる規範原理やそこでの主体のあり方(政府-コミュニティ-市場の役割分担等)を追求すると同時に、それらを通じて実現されるべき社会のビジョンを積極的に構想していく必要がある。現在の日本や世界において、無数の課題が日々生成し論じられているが、それらは概して個別の問題領域ごとにバラバラに論じられ、縦割りの対応がなされる傾向にある。たとえば、格差や貧困等をめぐる「福祉」に関わる領域と、地球温暖化、自然保護、リサイクル等をめぐる「環境」に関わる領域は、多くの場合まったく異なる文脈で論じられ、その相互の関係やそれらの全体を含んだ政策対応や社会モデルの構想といったことはほとんど行われていない。本シリーズは、こうした認識を踏まえ、「環境-福祉-経済」という3つの領域の全体を視野に入れ

た探求と、そこから展望される望ましい社会——「持続可能な福祉社会」(＝個人の生活保障や分配の公正が実現されつつ、それが資源・環境制約とも調和しながら長期にわたって存続していける社会)とも呼ぶべき社会——の構想を追求していきたい。

* * *

いささか手前味噌となってしまうが、ここで提起されているテーマは現在の日本においてそのまま引き継がれていると思われるし、さらに僭越が許されるならば、「福祉」と「環境」を総合化した「持続可能な福祉社会」というコンセプトは、その後(2015年に)定式化されたいわゆる「SDGs」の理念に先駆する内容だったと言えると思われる。

そして先述のように『公共研究』がその後も継続的に刊行されるとともに、COEの活動を超えてさらに大きく発展した様々な研究プロジェクトが行われて現在に至っていることは、客観的に見ても誇るべき内容と言えるのではなからうか。

最後に若干の個人的述懐を記すことをお許しいただきたい。COEの活動を通じて、あえて単純化して類型化するならば、研究者には(a)職人型、(b)リーダー型、(c)コーディネーター型と呼べるようなタイプがあると感じるようになった。私は明らかに(a)の典型であり、“自分の好きなことを研究して本原稿を書いていく”こと以外にはほぼ関心がなく、それが趣味＝仕事のようなタイプの人間だった(今もそうだが、当時は現在以上に八ヶ岳山麓の貸別荘にこもって原稿を書くことが多かった)。

そうした人間にとってはCOEのような、多くの研究者が参加し、一定額の研究予算を確保した上で様々な研究を計画的に進めていくようなプロジェクトの“拠点リーダー”という職務が十分に果たせるはずもなく、したがって私自身苦勞することが多かったが、しかしサブリーダーの先生方(上記の文章にある「公共哲学」「国際公共比較」「公共政策」という3つの部門に対応して各々小林先生、雨宮・柳澤先生、倉阪先生)を中心に実に優秀な研究者の方々が多

く——研究内容のみならず研究のマネジメントにおいても——、また若手の研究者の方々も研究面で優れているだけでなく人間的にもしっかりした方々がそろっており、その意味では（少なくとも私にとって）千葉大学の本 COE はきわめて恵まれた環境の下で進められたということを、今あらためて痛感している。

現在進行中の様々な研究プロジェクトとともに、『公共研究』がさらに発展していくことを祈念して、20 巻刊行のお祝いメッセージとさせていただく次第である。

（ひろい よしのり）